〈青森県史〉の窓 214

奇跡の車両「DC351」

村本 恵一郎
（五戸町教育委員会 教育課 課長補佐）

南部鉄道は、1930（昭和5）年に尻内（現八戸）駅と五戸駅間で全線開通した、五戸電気鉄道を前身とする五戸町唯一の鉄道である。開業以来、多くの人と物を全国に運んだ南部鉄道は、まさに五戸町の経済的、文化的発展を担った大動脈だった。

町民の生活を支えた南部鉄道の廃線は、突然の出来事だった。1968（昭和43）年5月16日に発生した十勝沖地震で鉄道施設に大損害を受け、廃線へ追い込まれたのである。

廃線後、鉄道軌道跡は道路や遊歩道となり、車両も全て処分された。しかし、南部鉄道を走った車両が奇跡的に現存していることは、最近まで多くの町民から忘れられていたのである。

その車両は35tディーゼル機関車「DC351」である。DC351は、1956（昭和31）年に南部鉄道の主要取扱貨物であった木材の輸送量拡大に対応するため導入された。

55年ぶりに五戸町へ帰ってきたDC351＝2022（令和4）年4月16日・筆者撮影

DC351以前の機関車は蒸気機関車だった。ディーゼル機関車は蒸気機関車と比較して発車準備の簡略化や運行人員の減少が図られたため、増加する輸送貨物に対しても効率よく対処できるようになった。

DC351は南部鉄道の近代化に大きく貢献したが、整備費用の増大やディーゼルカー（客車）の増車方針などの要因もあり、十勝沖地震前年の1967（昭和42）年に京都府与謝郡の加悦鉄道に移譲された。

このような偶然が重なり、DC351は奇跡的に十勝沖地震の被害を免れた。加悦鉄道では、地元住民の通勤通学の足として客車を、日本冶金工業（株）大江山製造所の製品であるフェロニッケル等の輸送のため貨車を牽引するなどして、1985（昭和60）年の廃線まで活躍した。

加悦鉄道の廃線後、DC351は1995（平成7）年までは加悦駅構内跡に展示。翌年には大江山鉱山駅構内跡に開園した加悦SL広場の展示車両となった。現役時代と同様に定期メンテナンスを受けていたため、良好な状態で保存されていたが、加悦SL広場は2020（令和2）年3月に閉園し、DC351を含め27両あった展示車両を譲渡する決断がなされた。

2018（平成30）年に町の歴史民俗資料館である「ごのへ郷土館」を整備し、南部鉄道の歴史継承にも注力していた五戸町は、DC351の移設保存を図るべく、いち早く日本冶金工業（株）と協議を始めた。そして閉園から約半年後の2020（令和2）年10月に、DC351の五戸町への無償譲渡が決定した。

実際にDC351を五戸町へ移設するには輸送費の確保が懸念されたが、クラウドファンディングを実施した結果、全国各地の314人から約570万円の募金が寄せられた。こうして2022（令和4）年4月、DC351は再び五戸町へ戻ってきたのである。

五戸町民をはじめ、加悦鉄道と南部鉄道に関わった人々や、全国の鉄道ファンの支援を受けて、DC351は55年ぶりに五戸町に帰郷した。DC351には、五戸町が鉄道と共に発展した時代の象徴だけでなく、十勝沖地震という五戸町にとって未曾有の大災害の記憶継承の象徴としての役割が期待されている。ごのへ郷土館では今後、DC351を十勝沖地震の教訓を生かした、防災教育の教材としても活用する方針である。

『東京と青森』663号、東京青森県人会、2023年7月号。